

はあとふる ふくしま



2012

11

Vol.199

発行・企画編集
社会福祉法人 福島県社会福祉協議会
TEL (024) 523-1251(代) FAX (024) 523-4477
URL <http://www.fukushimakenshakyo.or.jp>
メール heartful@fukushimakenshakyo.or.jp



どっぴいいても、
安心できる子育てを。



今月の 表紙

原発事故による放射性物質への不安などから約4千人が福島県から山形市に避難しています。その過半数を占める子育て世代を対象に、NPOがサロンやサークル活動を支援。市社協では、山形市避難者生活支援相談員を5人配置し避難者の生活支援活動などを行っています。

(詳しくは2～5Pで紹介)

特集 | 2

福島から山形へ ～県を越えた避難者への支援～

[ふくしま明日への一步] 6

笑顔を届けたい! 学生が築く被災地との絆
～桜の聖母短期大学の移動文化祭～

情報掲示板 8

第20回「瓜生岩子賞」受賞者の横顔



「はあとふる・ふくしま」の作成経費の一部として、共同募金配分金および特別賛助会員の寄付金を使用させていただいております。

特集

福島から山形へ 県を越えた避難者への支援

昨年の原発事故の影響により、現在も6万人近くの福島県民が県外に避難しており全国各地で避難者を受け入れています。最も早くから、数多くの福島県民を受け入れてきたのが隣の山形県です。いまだ先の見えない状況で、山形市内で暮らす福島県民を支援する動きを取材しました。

1万人を超える避難者が 現在も福島から山形県に

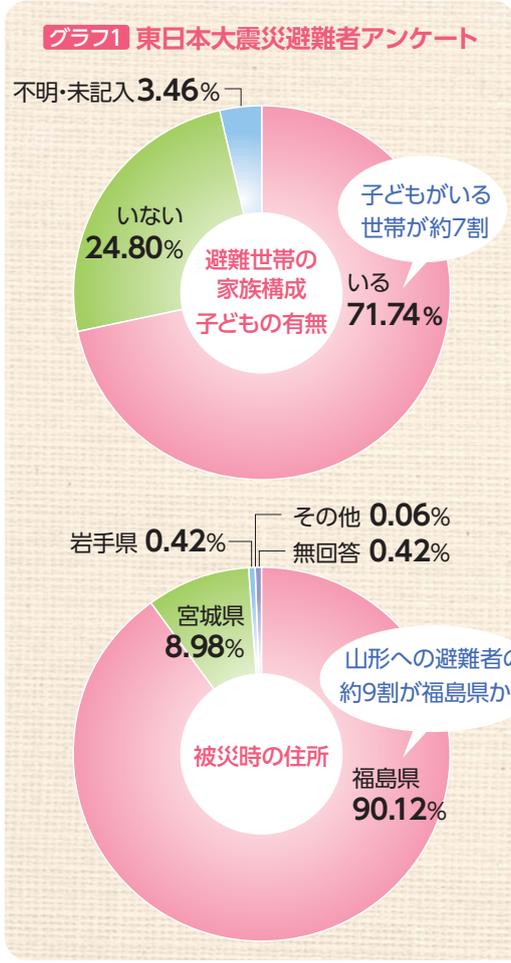
福島県内では現在も10万人近くが避難生活を送っていますが、県外にも約6万人が避難中です。県外避難先で最も多いのが山形県で約1万8百人。次いで東京都の約7千6百人、新潟県の約6千百人です。

県外への避難の場合には、仕事のあ
る父親は福島県に残り、原発事故の影響を懸念する母親が子どもを連れ、借
上げ住宅に「自主避難」するケースが
少なくありません。

山形県が昨年11月に行った『東日本
大震災避難者アンケート』**グラフ1**
によると、避難世帯の約7割が子ども
いる世帯で、その半数以上が母子(父
子)世帯でした。

被災時の住所は、約9割が福島県で、
被災地の所在は、「原発30km圏内また
は計画的避難地域内」が27・29%、「津
波被災地」が6・97%、これらの地域以
外が62・28%と最も高い割合です。

現在の住まいは「民間アパート・貸
家が77・62%で最も多く、次いで「公
営住宅」が10・79%でした。



約千四百世帯が暮らす 山形市内での取り組み

山形県内で最も避難者の受入数が多いのが山形市で、今年9月2日現在、4千578人、1千497世帯が暮らしています。(うち福島県からの避難者は4千379人、1千409世

調査地域: 山形県全域
調査方法: 東日本大震災により山形県内に避難されている4,651世帯
調査期間: 平成23年10月中旬～下旬
週計数: 1,649件 (回収率35.5%)
 ※平成23年11月
 山形県広域支援対策本部避難者支援班調べ

帯)。昨年夏には、避難生活を支えるために、NPO団体が子育てサロンなどの支援活動を始めました。また、山形市社協では今年3月に山形市避難者生活支援相談員を5人配置。市内の各地域に点在する借上げ住宅を訪問し、孤立の防止などに取り組んでいます。

大変な選択を迫られたお母さんたちの子育てを尊重したい

福島から来たお母さんたちを支援するNPO

特定非営利活動法人やまがた育児サークルランド 代表 野口比呂美さん



「自分が子育てしていた時のサークル活動が楽しかったので、平成10年にネットワークを組織。平成15年にNPO化しました。」

「ここに来て大丈夫？」そんなお母さんの一言から

私たちは、山形市の中心部にある元百貨店の空きビルで子育て支援施設『あぐべ』を運営しています。

震災直後のある日、珍しく若い女性が一でこられました。「どうしたのですか？」と聞いたら、「ここに親子で来て大丈夫ですか？」と聞くのです。その方は郡山市から避難してこられた方でちょうどその頃、福島県の方が県外避難された時に、心ない人から車を傷つけられたというような話があった不安を抱えているようでした。

私たちとしては安心して来てもらうで大丈夫だと思いましたが、もし福島から来たお母さんが気兼ねするのは

ら、少人数で福島県の人が集まれた方がいいのかなと、避難されている方たちが多い地域にサロンの出前に行きました。それが去年の7月のことです。最初は、浜通りからきていた方が多かったのですが、秋ごろから中通りのお母さんたちも増えて、年末には200人くらい集まりました。

声を聞き、形を変えながらサロンとサークルを展開

もともと山形市は自主的な子育てサークル活動が盛んで、私たちもその活動支援や横のつながりづくりに取り組んできました。福島県から来たお母さんたちも、これだけ人数が集まるのであれば、いずれは自分たちで助けあっていた方がいいよねということから、子育てサークルを地域ごとに3つ立ち上げました。

それから、出前サロンは「子連れでない」と入りにくい」という意見があったので、子どもが学校に行っている間、お母

さんたちだけで情報交換できるサロンを始めました。

また、「サークルで4〜5人のお母さんが集まって話していると、その輪のなかには入りにくい」という声もありました。そういったお母さんの居場所を設けようと1軒家を借りて今年4月から始めたのが、

『ままカフェ@home』です。ここは、平日10時〜16時にはスタッフがいて、いつでも立ち寄ることができます。



気軽に立ちよれる「ままカフェ@home」

避難されてきたお母さんの共通点とは

避難されてきたお母さんにはいくつかの共通点があります。まず①母子世帯が多い。②経済的な負担感が強い。③健康や先行きに不安が大きい。そして④孤立傾向にあるということです。これらを踏まえると、誰かと話をすることで不安感を軽減したり、お母さん同

士で子どもの面倒を見られる関係にしていきたいのです。実は私たちにできることは多くありません。周りの人たちと助けあえる子育て環境の「つながり」になればいいと思います。

それから、避難するにしても、しないにしても、福島のお母さんたちは本当に大変な選択を迫られています。私たちは、皆さんの選択を尊重していきたいし、それを尊重できる場所が必要なのだと思います。

どいで災害があっても安心して子育てができるように

「震災だから」ではなく、これだけ支援を必要とする親子が増えているのだから、何かしないと……という意識で福島のお母さんたちの支援に関わってきました。もともと転勤族のお母さんに対して行っていた子育て支援が参考になりました。今回の取り組みも貴重な経験です。これから災害があったときに、この地域の人たちが避難生活を送ることになっても、不安なく子育てができるようにしなければと感じました。私自身、子育て支援の全国組織にかかわっていますので、災害時にもお母さんと子どもが安心して子育てをできるネットワークを全国的に作っていききたいと思います。

福島県から 山形市に避難している お母さんの声

参加者が自主的に運営している『サークル・ままだーる』、自由に立ち寄れる『ママカフェ@home』、就学児のお母さんによる『サロン』の参加者の方たちに、山形に避難した理由やいま考えていることなどを教えてもらいました。

『サークル・ままだーる』に参加していた2歳の子のお母さんの

声

昨年の夏に避難しました。戻るとしたら来年以降になると思います。夫は避難に賛成していますが、その親からは「だいぶ除染が進んでいるよ」と、遠回しに「帰ってくるよ」と言われます。子どもは一緒に歩いていると、唐突に道路端の石ころを集めをしたりしているのでもまだ戻るのに不安があります。

山形市では平口の口中は子ども一人きり。子どもは身体をつかったダイナミックな遊びをしたがるので相手をするのは大変です。サークルではボランティアの方が思いっきり遊んでくれるの、(ママ)も喜んでいきます。



福島県から避難中のお母さんが公民館で開催している『サークル・ままだーる』で。

月々金にオープンしている『ママカフェ@home』にきていた2歳の子のお母さんの

声

夫と子どもと家族3人で去年の9月に山形市に避難。これから先どうしようという不安が常にあります。山形市に避難したのは、福島県から近いのが一番の理由。借上げ住宅の制度も助かりました。山形市に来て良かったことは、安心して子どもを外に出して遊ばせられること。ちょうご子どもが歩き始めるころ原発事故が起きたので…。これから先どうしようか、夫婦でもよく話し合っています。経済的なことも考えながら、どこで子育てをしてくか決めたいと思っています。

『ママカフェ@home』にきていた2歳の子のお母さんの

声

去年の7月、アパートの借上げ制度が始まる前に山形市に避難しました。週末に夫が来ることができる距離で、放射線量が低い場所だったから。先に避難を決めていると調べていた友達がいだったので教えてもらいました。こちらに住むようになって困ったことは、周りに頼れる人がいなかったり、夜が怖かったりしたこと。最初は病院や買い物をする場所が分からなくて不安だったけれども、なんとか慣れてきました。

『ママカフェ@home』は、チフシをもらって知りました。ここに来て同じ年頃の子どものお母さんと話をすると気分転換になりますし、スタッフの方にちよつとした相談ができるのが安心感につながっています。



『ママカフェ@home』で。

小学生の保護者対象のサロンに参加していたお母さんの

声

去年の夏に避難。子どもと自分の健康状態が悪化していたので避難を決めました。山形市に来て安心できた部分もありますが、困ったことも多く、子どもが入院したとき、子どもを病院に一人で置いたまま入院の準備をしに自宅に戻ったこともありました。

春に自主避難者の高速道路無料化が終わったのは残念でした。このサロンには同じような境遇のお母さんが多いので、不安なことについても安心して話せることができず。



『ままだーる』では、やまがた育児サークルランドのスタッフもお手伝いしています。

同じ住民として安心して生活してもらいたいから

山形市避難者生活支援相談員が避難者をサポート

山形市社協 地域福祉部門 福祉のまちづくり係 結城英彰さん



「避難されている方々の孤立を防ぐために、手探りで活動しています」と結城さん。

福島県出身の生活支援相談員も活動

山形県内に避難されている方の生活支援などを行う「生活支援相談員」の配置が決まったのは昨年末です。山形市は民生委員児童委員がすでに見守りや訪問活動を始めていましたので、そちらとの調整が必要になりました。地域の民児協の協力を仰ぎながら、実質的な活動を始めたのは今年5月です。

山形市には、最大時1千6百世帯が避難されていました。しかし個人情報を得ることが難しく、山形県が昨年実施したアンケートで「個人情報提供」に同意された約400世帯をベースに相談員の訪問活動を始めました。現在も訪問件数を増やすために、やまがた

育児サークルランドが行うサロンに出向いたり、避難者交流支援センターが主催するイベントでPRしているところ。

5人の生活支援相談員のうち、2人が福島県出身です。そのことを話すと踏み込んだ話をしてくれることが多いようです。なかには環境の変化や先行きの不安でうつ傾向になっている方もいますし、元々もっている疾患が悪化してしまったりと聞きます。相談員は、それぞれのケースに応じて訪問の頻度を判断しています。圧倒的に多い母子世帯への支援は必要ですが、移動手段をもたないことで孤立しがちな高齢の方の見守りも必要だと感じています。

社協のネットワークを生かす情報の共有化や連携を

「いつかは福島県に戻りたい」とその時期について悩んでいる方がいる一方で、「もう避難者扱いしなくていいですよ」という方もいます。訪問したあと、



避難者生活支援相談員は、ままカフェ@homeなどのサロンにも顔を出しています。

「来てくれてありがたかった。でも大丈夫です」と電話をくれた方もいました。いずれにしても山形市で安心して生活してもらいたいと考えています。

山形市には、30地区すべてに地区社協があるので、そちらで行われている子育てサロンなどにも参加してもらえよう呼びかけも意識して行っているところ。

今後、福島県に戻る方が増えれば、福島県の生活支援相談員さんとの連携も必要になってくるかもしれません。山形市社協の生活支援相談員の活動は手探りで進めてきました。これからは県境を越えた社協というネットワークを生かしながら、情報の共有化や関係機関への連携を進めていければと思います。

つながりを力に

やまがた育児サークルランドの野口比呂美代表は、「山形市で生活する福島のお母さんたちの子育てサークルの名が『ままだごーる』ということからも、お母さんたちの心にはいつも福島への深い想いがあることがわかります」と話します。東日本大震災による被災、そして放射性物質に対する不安というかつてない事態に、避難されているお母さんたちの複雑で不安定になりそうな気持ちと生活を支援者の方々はしっかりと受け止めています。

まずは今、山形市で不安なく生活してもらいたいこと、そして今後はお母さんたちの福島への想いをそれぞれのネットワークのなかで受け入れ、やがて福島での継続した支援につなげられるように、県を越えた支援の連携の必要性を視野に入れています。

一人ひとりが考え、選択した立場から、心を閉ざすことなく不安や悩みを口にできる環境も必要だと考えます。いつか福島に帰るときに、避難していた方々が孤立することなく避難前の生活に戻ることができるよう、福島での生活への不安や悩みに対する理解を深め、県内外での支援活動のつながりと連携を作っていくことがこれからは必要となっていくでしょう。

明日への一歩



福島市

取材協力

桜の聖母短期大学
〒960-8585
福島市花園町3-6
TEL (024) 534-7137
http://www.sakuranoseibo.jp/



2



3



1

1.移動文化祭当日、オープニング前の円陣。願いはひとつ…「笑顔のわ」をつくろう！ 2.お笑い芸人による公演では、会場いっばいに笑い声が響きました。 3.エンディングセレモニーで、大空に向かってバルーンを飛ばしました。

笑顔届けたい！ 学生が築く被災地との絆 ～ 桜の聖母短期大学の移動文化祭 ～

南相馬市の住民数は、福島第一原発事故の影響により一時1割にまで減少しましたが、現在は6割まで回復しています。その一方で今もお帰還が困難な区域もあり、『日常』と『非日常』が混在しています。福島市の桜の聖母短期大学の学生は、そんな南相馬市の復興を応援し、住民の方々に笑顔届けたいの思いから、初の試みとなる移動文化祭を開催しました。

被災地の復興に向けて何が
できるか自ら考え、実行

桜の聖母短期大学では、震災からの復旧・復興のただ中にある福島県の現状を多角的な視点から学び、今後の課題を考える「福島学」を今年度から開講しています。放射性物質の影響や生き方を考える講演会を月に一回開催するほか、被災地を視察するなどの実践的な取り組みも行っています。

「福島県の実態を正しく知り、自分たちは何をすべきか考え、力の限り挑戦してみる。さまざまな立場から物事を考えることで人間性を養い、主体的な学生を育てたいと思っています」と講師の三瓶千香子先生。

桜の聖母短期大学と南相馬市は以前より友好協定を結んでおり、今年4月と9月には原町青年会議所の協力のものと現地視察を実施しました。「南相馬市は津波の被害で東西に、放射性物質の影響で南北に分断されており、住む場所が少し異なるだけで住民の方の感情が異なることがわかりました。それぞれに応じたメンタルケアの必要性を感じました」とその時の印象を語る生

活科学科福祉こども専攻ライブデザインコース2年の本間智絵さん。福島市に在るだけでは分からなかった実態を知った学生たちは、「南相馬市の皆さんを笑顔にしたい」という思いを募らせました。

「被災地に対し何ができるのか」。その問いを深めた学生たちは、学生ならではのイベントである文化祭を南相馬市で実行することにしました。「南相馬市と桜の聖母短期大学の間で今後につながる架け橋をつくること。笑顔の大切さを再度感じること。震災を風化させないこと。そして学生同士が共働して取り組むこと。これらを目指して、福島学を受講する学生らが協力し合って、移動文化祭を開催する運びとなりました」と三瓶先生は教えてくれました。



「震災により一度は分断された南相馬市とのつながりを、これまで以上に深めるための取り組みのひとつが移動文化祭なのです」と三瓶千香子先生。



移動文化祭を成功裏に終了させた学生の表情は、澄み渡る青空のよう。



桜の聖母短期大学の名前にちなんだ、桜満開のポスターを学生が作成し、移動文化祭を告知しました。

千人の来場者と交流。フレッシュユナ「笑顔のわ」広がる

約5カ月かけて準備した移動文化祭は、絶好の文化祭日和となった9月16日、原町区の道の駅南相馬で開催されました。

キャッチコピーは『今日ゆう Smile! 桜でつなぐ 笑顔のわ』。「今日この日に笑顔を共有したい、あなた(YOU)と笑顔をゆう(結ぶ)、という意味を込めました」と実行委員長を務めた本間さん。その内容は、来場者の笑顔の写真を撮り花びらに見立てて桜の木のイラストを満開にするモニメントコーナー、お笑い芸人や大道芸人が登場するステージ、バルーンアートや小麦粉ねんどなど子どもが楽しめる遊び場、手作りハッピーナッツクッキーの販売などを行う屋台コーナーの、4つのブースで構成しました。サブリーダーの生活科学科福祉こども専攻ライフレデザインコース2年、齋藤あかねさんは「企画から準備、運営まで、やるべきことはたくさんありましたが、みんなの力を結集しました。子どもの来場者が少なかったことは残念でしたが、避難されている方々が再会する機会になったと思いますし、私たちとも交流を図ってくださった、たくさん笑顔が共有できました」と嬉し顔。同じくサブリーダーで同コース2年の齋藤史恵さんは「移動文化祭に関わった学生70名それぞれが、地域の



「福島青年会議所をはじめ多くの方に移動文化祭を支えていただいたことにも、人とのつながりの大切さを感じました」と左から齋藤史恵さん、本間智絵さん、齋藤あかねさん。

皆さんを笑顔にしたいという一心でした。簡単なことではなかったのですが、来場された方から南相馬市のためにありがとうという言葉をいただき、開催の意義を感じました」と感慨深く話してくれました。

『コミュニティー』を再構築。今後の支援に繋がる架け橋

南相馬市の復興を後押しし、人々を元気にしたいとの思いから開いた移動文化祭でしたが、「移動文化祭の『成功』とは何だろうとずっと考えていました」と本間さん。「近くの仮設住宅から訪ねて来てくださった方とのちよつとした雑談からお互いの笑顔が生まれました。このような触れ合いが大事なんだと実感できたことが、私たちにとっての『成功』だと思いました」。

「移動文化祭を通して南相馬市と桜

の聖母短期大学との新たな『コミュニティー』が生まれたと感じた」と話すのは齋藤史恵さん。「これを基盤にさまざまな活動を展開し、南相馬市を盛り上げていければと思います」。齋藤あかねさんも「いつか仮設住宅にお邪魔して、移動文化祭のような大きなイベントでなくても皆さんと交流を持てたら」と次なる展開を思い描きます。

今回の経験は、主体的な支援活動への大きなきっかけとなったようです。

学生たちをサポートし続けてきた学生部長の橋谷田恵子さんは「今後は南相馬市の方に福島市に来てもらうという、双方の関係を学生に築いてほしいと思っています。11月の文化祭『あかしや祭』では南相馬市の野菜を販売する企画がありますし、つながりをさらに深めていければ」と期待を寄せています。

南相馬市に笑顔届けたいと願う学生たちの取り組みは、福島県の現状を深く実感しているからこそその熱意が込められています。その実践は、地域と学生ら双方にとつての紛れもない『明日への一歩』となったようです。



「福島学での学びを活かし、自分たちができることを一生懸命考え、精一杯取り組んだ学生たちに拍手です」と学生部長の橋谷田恵子さん。

知って
おきたい

福祉ワード

今回は

福祉避難所

東日本大震災では、高齢者、障がい者、病弱な方などが体育館や公民館などの一般的な避難所での生活によって、体調に支障をきたすことがありました。「震災関連死」の防止策を協議していた政府検討会でも、今年3月末時点で震災関連死者のうち87%が70歳以上の高齢者であり、原因は「避難所生活の肉体的・精神的疲労」が32%を占めたとし、平時から福祉避難所となる福祉施設を定めることなどを求める報告書をまとめました。

老人福祉施設、障がい者支援施設等が 福祉避難所に

福祉避難所とは、高齢者、障がい者、妊産婦、乳幼児、病弱者等、災害時に何らかの援助を要する在宅の要援護者のために特別の配慮がなされた避難所のことで、災害時に市町村が開設します。

福祉避難所として災害救助法が適用された場合は、概ね10名の要援護者に1名の生活相談員等が配置され、要援護者に配慮したポータブルトイレや手すり、紙おむつ等について、市町村は国県の補助を受けて確保することができます。

東日本大震災前より『福祉避難所設置・運営に関するガイドライン』（日本赤十字社）がまとめられていましたが、震災と東京電力福島第一原子力発電所事故の教訓を踏まえ、平常時から関係施設の福祉避難所の指定を検討する市町村が増えています。

福祉避難所として利用可能な施設として、老人福祉施設、障がい者支援施設等が予定されていますが、社会福祉施設等を福祉避難所として指定する場合は、市町村

と当該施設管理者との間で十分調整をし、指定に関する協定書を締結します。

福島市では、今年2月に社会福祉法人などが運営する施設など市内42カ所が福祉避難所として指定されましたが、震災の経験を踏まえ、今後、県内において福祉避難所の指定及び整備を推進していく必要があります。

県内の福祉避難所指定に関する状況

(平成24年5月1日時点 県保健福祉部調べ)

指定状況

福祉避難所を指定している	9市町村
今後、指定の予定をしている	34市町村
今後も予定なし	7市町村
検討していない	9市町村

指定施設の状況

高齢者施設	39カ所
障がい者施設	4カ所
その他の社会福祉施設	4カ所
その他(学校、公民館、保健センター他)	14カ所
指定施設総数	61カ所

ふくし インフォメーション

先進的介護福祉機器・ロボット実用化を 推進するための体験型・意見交換会

介護保険施設及び関係団体等を対象に、専門的な機器を実際に体験する場を提供します。また一般県民を対象に、生活に身近な機器を長期間展示し、介護ロボット・介護福祉機器等について知ってもらいます。

- 日時**
- 長期展示 平成25年2月まで 午前9時～午後5時
 - 短期展示 平成24年12月15日(土)、16日(日)
午前10時～午後3時

会場 福島県男女共生センター

- 内容**
- 長期展示 介護ロボットを身近な支援ツールであることをPRするため、コミュニケーション型ロボット等を展示。
 - 短期展示 移乗、リハビリ、食事支援、排泄等、生活者の自立支援を目的とした最新の介護ロボットに触れるためのコーナー設置。製品紹介やデモンストレーション。

お問い合わせ

福島県男女共生センター TEL(0243)23-8304

※ホームページで詳しく紹介しています。

入場料
無料

福島いのちの電話 秋季公開講座

毎年3万人を超えている自殺者の問題について、地域に情報を発信することにより、人々のメンタルヘルスの向上と、いのちの電話への理解と関心を深めていただくことを目指します。

演題 「かけがえない命」

講師 湯浅 誠

(自立生活サポートセンター・もやい事務局長、
反貧困ネットワーク事務局長)

日時 平成24年12月9日(日)

午後1時から午後3時

会場 いわき明星大学 AV 大講義室

対象 一般県民 300人

お問い合わせ

福島いのちの電話事務局 TEL(024)536-0032

第20回「瓜生岩子賞」受賞者の横顔

社会福祉事業の先覚者「瓜生岩子」は、1829年（文政29年）に現在の喜多方市に生まれ、1897年（明治30年）に69歳でこの世を去るまで孤児救済のための育児院や共済病院の開設などに挺身されました。岩子刀自*が県内に創設した鳳鳴会育成部（現在の児童養護施設「福島愛育園」）が100周年を迎えた平成5年に、福島県社会福祉協議会が岩子刀自の精神にふさわしい方々を表彰する「瓜生岩子賞」を創設しました。これまでに27名・1団体の方々が受賞されています。

第20回という節目を迎えた今年度は、長年にわたる輝かしい功績が讃えられた難波朝重氏（郡山市）、山下勝弘氏（西郷村）の2名が選出され、去る11月2日（金）、二本松市にて開催された第66回福島県社会福祉大会の席上において表彰が行われました。

*刀自（とじ）…主に年輩の女性を、敬意を添えて呼ぶ語。



なんば ともえ
難波 朝重さん
(68歳)

住所地：郡山市

役職

社会福祉法人郡山清和救護園 常務理事 / 東北地区救護施設協議会 会長
全国救護施設協議会 副会長 / 福島県福祉施設士会 会長

経歴

昭和52年11月～現在	社会福祉法人郡山清和救護園救護施設郡山せいわ園 (昭和52年11月～昭和53年3月 事務員) (昭和53年4月～昭和60年3月 事務長) (昭和60年4月～昭和63年3月 副園長) (昭和63年4月～現在 常務理事兼園長)
平成5年4月～現在	全国救護施設協議会 理事
平成11年4月～平成15年3月	日本福祉施設士会「福祉QC」全国推進委員会 委員長
平成21年4月～現在	東北地区救護施設協議会 会長
平成23年4月～現在	全国救護施設協議会 副会長

業歴

“地域のなかで 地域とともに”信頼される施設づくりによる継続的な福祉文化の創造と、利用者の意思や人格を尊重した利用者本位の質の高いサービス提供を運営理念とする社会福祉法人郡山清和救護園の常務理事兼園長として、30年以上の長きにわたり中心的な役割を果たしている。また、同氏は救護施設及びグループホームのほか平成20年から養護老人ホーム「希望ヶ丘ホーム」の運営にも携わっており、これらの施設では「福祉QC」サークル活動の先駆者として質の高いサービスの提供に努めている。

また、同氏は救護施設の東北地区救護施設協議会会長を務めるほか、全国救護施設協議会の副会長を務めるなど全国的にも活動の場を広げ、「福祉QC」サークル活動においても全国発表大会（主催：日本福祉施設士会）にて20年にわたり発表を続け、同園の最優秀賞をはじめとして多数の賞を受賞している。自身の施設における福祉サービスの質の向上と利用者本位の視点を重視する地域に根ざした福祉づくりばかりでなく、「福祉QC」活動を通じ県内外の施設に対しても指導・支援に取り組み、日常生活を営むことが困難な人たちの福祉向上に尽力している。



やました かつひろ
山下 勝弘さん
(76歳)

住所地：西郷村

役職

社会福祉法人牧人会 理事長 / 知的障害児施設白河めぐみ学園 施設長
知的障害児施設白河こひつじ学園 施設長

経歴

昭和37年4月～現在	日本キリスト教団大森めぐみ教会担任教師
昭和46年10月～現在	社会福祉法人牧人会 理事長 知的障害児施設白河めぐみ学園 施設長 知的障害児施設白河こひつじ学園 施設長

業歴

昭和46年に社会福祉法人牧人会が認可され、昭和47年の知的障害児施設白河めぐみ学園の設立をはじめとして、以後約40年にわたり知的障害者更生施設、知的障害児通園施設、知的障害者通所授産施設、生活介護事業所等の開設を積極的に進め、現在は第一種社会福祉事業（運営施設経営）9施設と、第二種社会福祉事業（短期入所、デイサービス、地域生活援助事業等）20事業所の運営を県内外にわたり行っている。

また、地域療育等支援事業にも取り組み、障がい児者の広域的・専門的な相談支援の窓口を同法人の4施設に設置し、在宅の障がい児者やその家族を支える先駆的な活動を熱心に行っているほか、グループホームを開設し障がい児者のノーマライゼーションの実現を図っている。このように一貫して知的障がい領域での活動に献身してきた同氏は、現在も地域社会の信頼と福祉ニーズに応え、障がい児者の生活支援活動に積極的な取り組みを続け、福島県の障がい者福祉の向上に尽力している。

赤い羽根 ささえあい



社会福祉法人福島県共同募金会

〒960-8141 福島市渡利字七社宮111 (福島県総合社会福祉センター内)

TEL (024) 522-0822 FAX (024) 528-1234

●メールアドレス akaihane@axel.ocn.ne.jp

●ホームページ <http://www8.ocn.ne.jp/~akaihane/>

赤い羽根共同募金ふくしま



平成24年度「赤い羽根 空の第一便」伝達式が行われました！

今年度の赤い羽根共同募金運動の開始にあたり、「赤い羽根空の第一便」伝達式が行われました。全日本空輸株式会社(全日空)の協力により昭和37年より全国的に実施しており、福島県では福島空港が開港した平成5年より始まりました。国民の多くの方々に広く福祉への理解と関心が深まるように…との願いが込められた厚生労働大臣及び中央共同募金会会長のメッセージが、「赤い羽根空の第一便」として全日空客室乗務員により全国各地に届けられます。

10月1日(月)、全日本空輸株式会社仙台支店長の高橋要二さん、客室乗務員の味戸真里絵さんが福島県庁を訪れ、佐藤雄平知事に厚生労働大臣メッセージと赤い羽根を伝達しました。

続いて、福島県総合社会福祉センターにおいて丹治一郎福島県共同募金会長へ中央共同募金会会長メッセージと赤い羽根を伝達しました。

10月1日からスタートした「赤い羽根共同募金運動」は、12月31日までの3カ月間実施されます。皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



▲丹治会長(左)の胸に赤い羽根を着ける客室乗務員の味戸真里絵さん。

「NHK 歳末たすけあい募金」による配分申請受付のご案内

障がい者の地域生活及び地域における子育て活動を支援するため、小規模作業所または地域活動支援センター、地域保育所を対象とした配分申請を次のとおり募集します。詳しくは、県共募ホームページをご覧ください。

●配分対象…障がい者小規模作業所または地域活動支援センター、地域保育所

●受付期間…平成24年12月3日(月)から平成24年12月26日(水)まで

●審査結果…平成25年3月に決定し、4月に通知予定

※「申請要領」及び「申請書」は本会ホームページからダウンロードできます。

福祉図書紹介

『くらしの法律 Q&A ー身近なトラブル解決法ー』

今までの「FunFun」に
頼れる一冊



日本女性法律家協会 編集

本書ではくらしの中で起こる様々なトラブルを取り上げ、難しい法律問題をQ&A方式でわかりやすく解説しています。

また、社会保障制度を利用する方法や税金の知識など、日常生活をサポートする為の情報も多数盛り込んでいます。

日本女性法律家協会に所属する90余名の弁護士が執筆した充実の内容です。

発行所 新日本法規出版
B5判・514頁
価格 定価3,465円(税込)のところ
特価3,118円(税込)
※2部以上購入の場合は送料サービス

〈購入方法〉
県社協総務企画課まで
ご連絡ください。

TEL(024)523-1251
TEL(024)523-4477
FAX(024)523-4477

社協通信

モリアオガエルの里として知られる川内村。今年1月に帰村宣言が出され、3月末から役場や病院、学校などが戻り、村の日常が一步一步回復しています。



1 10月に再開したサロンの様子。懐かしい顔ぶれに思わず笑顔。2 高齢者サポート拠点「あさかの杜ゆふね」でのそば打ち体験のワンシーン。3 川内村社協の皆さん。4 村の仮設住宅。美しい自然の中に3Kと2DKの50戸が並びます。

川内村 社会福祉協議会

職員総数:11名
(正職員9名・嘱託2名)

〒979-1202
双葉郡川内村大字下川内字
坂内133-5
TEL (0240) 38-3802
FAX (0240) 39-0556



エリア情報
(平成24年9月1日現在)
人口: 2,650人
世帯数: 940世帯
高齢化率(*): 35.8%
※65歳以上の高齢者人口が
全人口に占める割合

帰村の定着の遅れが 福祉分野にも影響

「川内村では、今年3月までに公
共施設と子どもがいるご家庭の除
染を終えて、今年度は地区ごとの
除染を計画的に進めているところ
です」と話してくれたのは、川内村
社協事務局長の森雄幸さん。住民
懇談会の資料によると、村内完全
帰村者(村で毎日生活を送っている
方は342人(村民の12%)、二地
域居住者を含めて1週間のうち4
日間以上村内で生活している方は
750人(村民の26.4%)と帰村率
は決して高いとは言えません。

「帰村宣言が出されたとはいえ、
放射線量への不安感、原発の補償
問題、雇用や進学への心配などもあ
って帰村の定着が遅れています。以
前のような村の日常には戻ってい
ないため、例えば移動手段が乏し
く、通院やリハビリ、買い物などで



「人口はまだ少ないものの、村には
地域コミュニティが維持されてい
ます。すべてはこれから」と川内
村社協事務局長の森雄幸さん。

不便を感じる高齢者が現実問題と
して浮上っています」。

サロンを再開 元気な笑顔あつまれ!

帰村しても高齢者は、近隣の方
と会話をする機会が以前よりも少
なくなり、閉じこもりがちになる
ことも。そこで川内村社協では、10
月からサロンを再スタートさせま
した。「久しぶりに会えたなって抱
き合って喜ぶ方もいました。今回か
らサロンに参加した方もいて、再開
できて本当に良かったです」と話し
てくれたのは、統括福祉活動専門
員の佐藤秀子さん。社協スタッフ
は、帰村後、サロン活動やデイサー
ビス、訪問介護事業などに加え、帰
村前から運営している郡山市の高
齢者サポート拠点「あさかの杜ゆ
ふね」での支援活動も継続的に行っ
ています。

「川内村の場合、避難地と村を往
復する二地域居住者がいるため、
福祉的なサポートも2つの場所を
見なければなりません。限られた
スタッフで活動せざるを得ないジ
レンマもありますが、村に戻られた
方、避難中の方、いずれの気持ちも

大切にしながら社協活動を行って
いきたい」と佐藤さんは話します。



「私自身、サロンの運営に携わ
るのが今回が初めてで少し緊張
しました」と統括福祉活動専門
員の佐藤秀子さん。

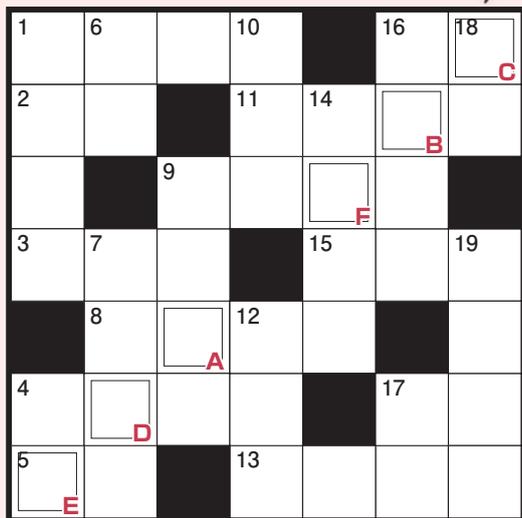
社協ならではの活動で 地域福祉を強化したい

川内村には、旧警戒区域に自宅
があり、住むことができない方の
ために仮設住宅が設けられていま
す。「仮設住宅には一人暮らしの高
齢者の方も入居されていますので、
生活支援相談員や民生委員さんの
訪問により密度の濃い見守りを行
っています。将来的には、高齢者同
士が助け合えるような集合住宅を
設けて、医療や福祉サービスと連
携していくことも視野に入りたい」
と森さん。

社協は村に戻り、村民それぞれ
の立場での生活支援を始めていま
す。住民がどの地域にいても、その
気持ちを一番に理解してくれる社
協の存在感があります高まってき
ています。

「チャレンジ!」 全部できたら二重ワクの6文字をABC順に読んでください。そのことが答えです。

クロスワードパズル



応募方法 ハガキにパズルの答えと ①住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号、業種 ②本誌に対するご意見、ご感想、ご要望 を全てご記入の上、下記までご応募ください。

締切 平成24年12月14日(金)

宛先 〒960-8141 福島市渡利字七社宮111
社会福祉法人 福島県社会福祉協議会
「はあとふる・ふくしまパズル係」

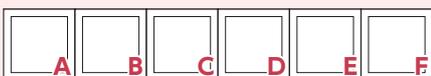
※ご記入の個人情報は適切に管理し、目的以外に使用しません。

↓タテのカギ

- ① 童謡『たき火』の道に咲いていました
- ④ 北海道土産『木彫りの熊』がくわえています
- ⑥ 折り紙の定番の鳥
- ⑦ 都・道・府・県・市・町・村
- ⑨ タクシーと違い街中で手を挙げても停まりません
- ⑩ ちくわ、カマボコ、はんぺんなどの主原料
- ⑫ 危うきに近寄らず、豹変します
- ⑭ 釘をカチカチカチトントントン
- ⑯ 日本、イギリス、スリランカ、キューバ・・・
- ⑰ 逆立ちすると頭が悪くなる動物ってなーんだ
- ⑱ 1文字取ると液体、ラの字を入れると個体になる気体
- ⑲ 糖分・脂肪分が40%以上含まれるビスケット

→ヨコのカギ

- ① 渡辺貞夫、坂田明、武田真治らが奏でる木管楽器
- ② 安来節ではコレでドジョウをすくいます
- ③ 代表作『檸檬』『櫻の樹の下には』、〇〇〇基次郎
- ④ 輪(環)がある太陽系内の惑星の英語名
- ⑤ 事業仕分けで有名になったスーパーコンピュータ
- ⑧ 内田航平選手がピタッと決めます
- ⑨ ヲフフンフーフンンムムムンンン
- ⑪ 酸性では赤、アルカリ性では青くなる紫色の染料
- ⑬ 高齢者を象徴する色
- ⑮ くだもの食べる部分
- ⑯ 代表作『小僧の神様』『和解』『暗夜行路』、〇〇直哉
- ⑰ 食べると法隆寺の鐘が鳴ります



今月の当選者の中から抽選で3名の方に、いいで工房(喜多方市)の「クッキー詰め合わせ」をプレゼントいたします。なお、当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。



9月号の正解

「共同募金(キョウドウボキン)」

多数のご応募ありがとうございました。

ふくしまから ありがとう

郡山の親切な方々、ありがとうございます。

今年の6月まで私たちは郡山市の仮設住宅に住んでいました。

耳の具合が悪くなり、紹介された近くの耳鼻科まで車椅子を押しながら歩いて行く時のことです。聞いた通りの道を歩いたつもりが、どうやら道を間違えたようだ気づいた時には、市内のどこにいますのか分からなくなり、困ってしまいました。そんな様子を見てか、近くで草刈りをしていた方が作業の手を止め、声をかけてくれ、ならば車で送ってあげると車椅子をトラックに入れて、耳鼻科まで送ってくれました。

仮設住宅への帰り道は、耳鼻科の方にしっかりと聞いたので大丈夫と思ったのですが、やはり迷ってしまい、道を尋ねたガソリンスタンドの若い方がわざわざ車で仮設住宅まで送ってくれました。

郡山の方々には本当にお世話になりました。川内村から離れ夜も落ち着いて眠ることができない日々でしたが、郡山の皆さんにとっても親切にしてもらいました。

私の自宅は、福島第一原子力発電所から20キロ圏内にあるため、帰村後も村内の仮設住宅に住んでいますが、その時いただいた多くの親切には感謝の気持ちでいっぱいです。



東日本大震災を経てお世話になった方への「ありがとう」の気持ちを、ぜひお寄せください。投稿方法など詳細は県社協ホームページをご覧ください。

福祉の求人、求職は福祉人材センターへ

12月の「福祉の仕事相談会」の日程

〈相談受付時間 午前10時～午後3時(全会場共通)〉

5日(水)	12日(水)	14日(金)	25日(火)
会津若松市 社会福祉協議会	いわき市 社会福祉センター	白河市 中央福祉センター	郡山市 総合福祉センター

県社協 人材研修課 福祉人材センター / メール jinzai@fukushimakenshakyo.or.jp

TEL (024) 521-5662 FAX (024) 521-5663

★ネット紹介システム(インターネット求人登録)は、

<http://www.fukushimakenshakyo.or.jp> の福祉人材センターホームページからアクセス!

ひとり親のみなさんの就業を応援します

12月の「就職相談会」のお知らせ

〈相談受付時間 午前10時～午後3時(全会場共通)〉

12日(水)	19日(水)	26日(水)
会津若松市 会津保健福祉事務所	福島市 県総合社会福祉センター	いわき市 総合保健福祉センター

●相談無料 事前に予約が必要です。

●随時、お仕事の相談を受け付けております。上記以外にも県内各地で相談会を開催しておりますので、お気軽にご連絡ください。

県社協 人材研修課

母子家庭等就業・自立支援センター

TEL (024) 521-5699

FAX (024) 521-5663

メール boshi@fukushimakenshakyo.or.jp

編集後記

プロ野球のドラフト会議で、光南高校の佐藤投手が西武ライオンズの5位指名を受けた。幼いころ父親を亡くし、女手ひとつで育ててくれた母親に恩返しをしたい…。名前が呼ばれた時はその思いがかなった瞬間だったのではないかと。

震災後、福島県内の社協や施設は全国各地の福祉関係者から温かい支援を受け続けている。いつか必ず恩返しを…その気持ちを持ち続けたい。

むらしま かつのり
福祉サービス支援課 村島 克典